

納屋とシマウマ

竹並 麻夕子

それは、花曇りの日の夕方だった。僕は愛犬のリユウを連れて、散歩に出かけることにした。縁側のガラス戸の向こうは、庭に面していて、灌木の茂みと犬小屋がある。小屋のそばには木の杭がうってあり、リユウはそこに繋がれているのだ。僕が庭に降りたつと、彼はうれしげに体をくねらせた。飛びついてくるリユウをあやししながら、リードの持ち手の部分をしっかりと握る。

「じゃあ、母さん、行ってくるから」

キツチンの方にいるはずの母親に声をかけたが、返事はなかった。まあいい。いつもいるべき時にいない、という人なのだ。僕はリユウを連れて、入り口の小さな木戸を開け、外に出た。

「今日は違った道を行ってみようか？ リユウ」話しかけても、もちろんリユウは答えない。ちぎれるように尻尾をふるだけだ。

少し考えたが、住宅街の向こうの土手を通って、山の方に向かうことにした。僕の住むにぎやかな地区と違って、田んぼや神社の鳥居が見える田舎めいた所である。

リユウのハアハアいうあえぎと僕の古ぼけたウォーキングシューズが立てる足音以外何も聞こえない。太陽はだいたい色の球みたいに見え、僕らの影が長く伸びていた。

「まあ、素敵な犬ねえ」

向かいからランニングしてくる女性がいるな、と思ったら彼女は足を止めて話しかけてきた。

「毛の具合がすごくいいわ。赤茶色っていうの？つやつや光ってて、何だか昔のヨーロッパとかアメリカの家具の色みたい。おまけに飾り毛がふさふさ垂れて、貴公子そのものね」

まったく手放しの讃辞である。女性は僕ぐらいで、二十一、二歳に見えた。長袖のTシャツに、白いランニングパンツを穿いている。貴公子でも何でもない、平凡な顔にくたびれたフリースのパーカーをおった僕は言った。

「この犬は、アイリッシュセッターっていう種類なんですよ。外見は品良く見えるけど、すごくいたずら好きで、手を焼かせられます」

「ふうん、そうなの。あんまり見たことないと思ったら、珍しい犬だね。名前は何ていうの？」

「リユウ」

「じゃあ、リユウ、またね。明日も会えたらいいわね」

女性は波に反射する光を思わせる、最上級の笑みを浮かべると走り去っていった。僕のことなど、リユウの背景くらいにしか見ていないみたいだった。

1
やれやれ。僕はリードをきゅっと握り直すと、土手の下の道に降りることになった。道の両側には玩具のブロックを思わせる、小さな家々が並び、門のところには、水仙やクロッカスが縁取りのようにつつましく咲

いている。どこからか、甘い春の香りも漂ってくるようだった。リュウは頭をグイとあげたまま、前をすたすた歩いてゆく。道は途中で、川をはさみ、田んぼの間を通る畔道に変わった。去年、稲を刈り取ったままの田には、藁色の小さな切株がきちんと整列していて、横から見ると、校庭の朝礼の時並ぶ小学生を思わせる。川は用水路に続いていて、そこには水門を開くポンプが設置されていた。

空には柔らかな霞がかかっていて、鳥が高い所を旋回している。西の方は淡い紫色に変色していて、黄昏の気配が音もなく舞い降りてくる――素晴らしい春の宵だった。

気づくと、僕らが歩いているのは、石灯籠が置かれた社と昔ながらの農家に囲まれた小道になっていた。左手は、竹藪の迫る崖になっていて、その上の小山には墓地や卒塔婆が並んでいる。山辺の道は暗く、ひんやりした風さえ首元を通りすぎていった。

「おい、リュウ。こんなところは早く通りすぎてしまおうぜ」

僕は、思わずリュウに話しかけた。路上には人っ子一人いないし、墓石の冷たく光る表面がこちらを向いているのも、気持ち悪い。大体、僕は子供の頃から墓地とか幽霊というものが大嫌いなのだ。小道を抜けると、辻みたいな場所に出てしまい、右側には神社の鳥居がそびえている。その前には、黒い板塀と長屋門が続く民家が見えた。

どうやら、ここらあたりはかつて村だったところらしい。僕は板塀に沿って歩いたが、すぐ大きく開かれた長屋門にゆきあたった。黒々とした門には、踏み石が続き、苔に覆われた庭がちらりと見渡せたが、僕の興味を引いたのは、門のそばに建つ納屋だった。正直なところ、その建物を納屋と言っているのかわからない。板塀や門と同じように、黒い木造で出来ていたが、門に向いた一角に大きなガラス窓が嵌めこまれ、中から不思議なものがのぞいてたのだ。

思わずひき寄せられるように、僕は門から納屋をうかがった。納屋の中には裸電球が天井から吊り下げられ、それは室内を淡いオレンジ色に照らしていたが、窓辺に立っているのはシマウマだった。

――シマウマ？

僕は一瞬目をつぶって、もう一度開いたが、なるほどそれはシマウマに違いなかった。黒いたてがみが長い首を覆い、真っ黒な目がこちらを見つめていたが、そのまなざしは僕よりはるか遠くに向けられているようだった。

「何だって、こんなものがあるんだ？」

僕は呟いたが、いくら考えてもわからなかった。リュウも、世にも不可解なものを見たというように、足元で目をぱちくりさせている。

「剥製かな？ でもそんなもの一般の家に置いておけるとは思わないし」
精一杯のぞきこもうとするのだが、ここからははっきり見ることができない。僕は思い切って、門内に入ると、窓のそばまで行って見るとにした。シマウマは窓のすぐそばに立っていて、不思議そうに首を傾けている。体全体に、黒い縞が走り、毛は光沢あるビロード地のように見える。耳は何かを聞きとろうというように、ピンと立てられ、長い睫毛が目の上に帳をおろしている。まったく、完璧なシマウマだった。シマウマ以上でも、シマウマ以下でもない。

「どちらさまですか？」

不意に、男の声が耳元で聞こえ、僕はあわてて振り返った。踏み石の上に、背の高い男が立っている。

「どうやら、この家に用事があるようにお見受けしましたが」

「あっ、いや……」
慌てたあまり、声が裏返った。僕の立場は客なんて、立派なものではない。

「すみません。このあたりを散歩していたんですが、こちらの家に変わったものがあるのが目を引いて、ふらふらと入りこんでしまったという訳です」

「変わったもの？」

男は首をかしげたが、すぐ「ああ」と微笑した。

「そのシマウマの剝製を御覧になったんですね。まあ、確かに珍しいでしょう」そう言いながら、近づいてくると僕のそばに立った。男は五十前に見えた。彫りの深い顔に、眉は陰鬱そうに寄せられ、頬には立て皺がくつきり刻まれている。どこか現実感のない、空虚なものが感じられたが、かつては好男子だったに違いない。

「本物のシマウマの剝製ですね？」

僕は男を見ながら、確認した。

「本物です」

男は手を顎のところによりながら、頷いた。

「ところで、あなたはこのあたりの方ですか？ お見受けしたことのないように思います」

「いえ、違います。この土手を行った向こうの地区から歩いてきたんです。そうですね、三十分くらい」

「そう。犬を連れて、散歩してたわけだ」

彼の視線が、リュウに向いた。

「なかなかいい犬ですね。賢そうだし、気品がある。あなたが毎日散歩してるんですか？」

「ええ、大体。まだ学生だから、時間は十分あるんです」

本当の所は農学部の子生だったから、実験や野外学習で忙しいはずなのだが、この二月ほど大学をさぼっていたのだ。突然、あらゆるものが面倒くさくなり、大学だとか友人との交遊というものから離れたくなったのだが、僕の心理状況なんてこの際どうでもいいだろう。

「そうかい？」

突然、男の口調がぞんざいになった。顎にやっていた手を離して、僕の方に指を突き付ける。

「だからといって、見ず知らずの他人の家に入りこむ人間なんて、そういない。君が暇を持って余している学生であつたとしてもだ」

「はあ」

論点が微妙にずれている気もしたが僕は大人しく頷いた。

「それは、本当に非常識なことだと思つていきます。でも、僕には、この窓からシマウマが顔をのぞかせているのが、現実とは思えないくらい意外だったんです」

僕たちの間に、しんとした沈黙がおりた。夕暮れの残照が男の顔を照らしたが、その大部分は暗い影に沈んでいる。庭の入り口には、枝垂れ桜が薄桃色の花を夕風にそよがせていたが、その花びらが音もなく散り

続けるのだけが、唯一の動きのようだった。しばらくして、ようやく男が口を開いた。

「じゃあ、君はどうしてシマウマが、こんなところにいると思うんだ？」
「そんなことわかるわけじゃないですか。シマウマなんて、動物園にしかいません。ひよっとして、動物園にある霊安室とかからこっそり運んできたんですか？」

思わず口から出た言葉だったが、僕には、本当に動物園の霊安室というものが思い浮かべられるような気さえしてきた。それは、動物たちの居住スペースや売店、来園者のための食堂といった表舞台からは離れた隅っこに、ひっそりと存在しているだろう。単なる事務所としか見えないう建物、壁は、鼠色に汚れ、ひびわれさえ走っている。中に入ると、理科の実験室みたいに長いテーブル台が幾つも並び、その上には死んだ動物たちが横たわっている。

インパラやゴリラ、ペンギンたちがガラス玉のような目を見開いたまま、足をぴんと硬直させているだろう。彼らはもう眠りもしないし、ぴよんぴよん飛び跳ねることもない。宇宙空間の闇のような冷たい沈黙が、彼らを包んでいる。部屋の隅には、格納庫を思わせる金属製の扉があるかもしれない。そこは冷凍庫で、動物たちが氷でできた彫刻のように一体一体飾られている――。

「君は面白いことをいうね」

男は愉快そうに言ったが、どこかからかうような微笑が唇のはしに浮かんでいた。

「私が、シマウマの死体を盗んできたという話は、確かにありえないことじゃない。現に、こうして剥製があるんだし」

シマウマは、僕たちの会話など素知らぬ気に、立ちつくしている。黒曜石のように輝く瞳は、深い沼を思わせるし、鼻孔は今にもひくついて、春の宵の匂いを嗅ぎ取りそうだ。薄紫がった夕闇と温かな灯りに照らされたシマウマの姿には、夢の情景に出てくるみたいな遥かさがあった。

「確かに、私はシマウマを手に入れた。でも、それは動物園からでもないし、アフリカから持ってきたわけでもない。サーカスから、運んできたのさ」

「サーカス？」

僕はオウム返しに聞いたが、その言葉の意味が今一つぴんとこなかった。

「サーカスって、テントで巡業して回るやつですか？」

「もちろん、そうさ」

男は当たり前じゃないか、というように頷いた。

「私は、若い頃サーカスが好きだったんだ」

「えっ？」

またもや驚くような言葉を耳にした。目の前の男の憂鬱そうな様子には、本だらけの部屋で退屈そうに詩集の頁をめくっている人の雰囲気があった。カーニバルやサーカスといったお祭りに、歓声をあげるところなんて、想像もつかない。

「意外そうだね」

「はい」

「まあ、そうだろうが」

納屋の窓に手を置きながら、男は続けた。

「私は子供の頃から、スポーツも音楽も嫌いだった。体を激しく動かして、汗臭くなるんでごめんだったし、楽器を奏でたり、歌ったりするのもうるさいだけに感じられた。だが、サーカスだけは別だったんだ。色とりどりのカラフルなテント、その上につけられた小さな旗：：：そういうったものを見ただけで、夢の世界に連れられていくような気がしたものだ。テントの外には、出番を待つ象が鮮やかなシヨールを背中にかけている。そばには、持ち運びできるメリーゴーランドがゆっくりと回転していたっけ。そういうものを見ると、ハーメルンの笛吹き男についてゆく子供たちのように、ふらふら近づいていかざるを得なくなるんだ。夕暮れ時、薔薇色の光を浴びて立つサーカスのテントを見ると、胸の奥がうずいた。うまく言えないが、それは『郷愁』というものだったのかも。しれない」

僕は黙って、耳を傾けていた。

「昔は、この田舎町にもサーカスがやってきた。二年に一度、季節は決まって夏至の頃だった。はじめて、一人で行ったのは多分中学二年か三年の頃だろう。テントの幕をめくると、動物たちの匂いや埃が鼻孔を刺激して、ちよつと苦しくなったのを覚えてる。中央には、丸い舞台があつて、それを取り囲むように階段席がしつらえられている。――まるで、古代円形劇場みたいだね。私は、運よく前の方に座ることができた。ベルが鳴り、明かりは舞台まわりだけに、ぽつんとつけられる。そして、空中ブランコやライオンの輪くぐりといった演技が終わった後、この子がでてきたんだ」

男は、指でシマウマを指し示した。

「もちろん、一頭だけで出てきたんじゃない。六、七頭ぐらいずらりと出てきて、行進して見せたり、舞台の端に並べられた太鼓を足で叩いて回ったりする：：：それを見てると、ひときわ体の小さなシマウマがいるのが目についた。そのシマウマは、他の群れと違って、うまくリズムを取る手ができないみたいだった。行進したり、走ったりする時、仲間たちから半歩ほど遅れたし、太鼓を叩くのも不器用だった。そして、前脚の縞がハート形に丸まっているのも、他のシマウマとは違っていたんだ」

僕は、ガラス窓に顔を寄せて、中のシマウマを見た。その前足の縞の一つは、たしかに不自然に丸い形になっていて、ハート模様に見えないこともなかった。

「その子のことが、何だか心に残った。体が小さいのは、まだ子供だからに違いない。今度見たら、堂々としたシマウマになっているに違いないってね。それから、二年後サーカスがやってきた時、もちろん私は見にいった。彼のことはすぐわかった。相変わらず体は小さいし、演技も下手だ。黒い目をおどおどさせ、長い睫毛がせわしなく瞬く様は、シマウマというより、哀れなロバを思わせたものだったよ」

「ずっと、そのシマウマに会いに行っていたんですか？サーカスがやってくる度に」

「まあ、そう言っているかもしれない。私のサーカス通いは何年も続いた。そして、私が君くらいの子だったと思うが、それは唐突に終わった」

「えっ？」

「その夏も、私はサーカスのテントに入りこんだ。人間ピラミッドやら、象使いの曲芸やらが終わった時、決定的な異変が起こっているのに気づいたんだ。フィナーレ近く、シマウマ達が現れた時、この子がいなくなっただ。何度目をこらしても、ハート形の縞を持った小柄なシマウマはいない。——思いあまった私はショーが終わった後、テント裏の楽屋を訪ねた」

「……」
「楽屋は、トレーラールームの一室だった。華やかなショーとは全然違う、書類やら舞台道具がごたごた積み重ねてある場所だ。団長だということも、ごくありきたりの中年男だったが、彼は私がシマウマについて聞くと、『死んだよ』とあっさり答えた。『それも、昨夜突然にですよ。急に体を転げまわして、苦しみはじめたと思ったら、獣医を呼んでくるのも間に合わず、死んでしまったんだ』。『どうしてです？』と、私は聞いたさ。そんなことがある訳ないと思っただからね。『胃捻転だよ。動物には、時々あるらしい』と彼は答えた。——私は、彼に頼んで、シマウマの遺体を見せてもらった。それは、楽屋横の倉庫に横たわっていたよ。この子は、安らかな顔をして、目はぱっちり開けたままだった。どこにも、苦しんだ様子はなかった。……それで、私はこの子の遺体を引き取らせてくれ、と頼みこんだんだ」

「えっ、本当にそんなことを頼んだんですか？」
僕は驚いて、叫んだ。まったく、そんな話は聞いたことがない。男は唇の端を曲げて、笑った。

「たしかに、サーカスの者たちも呆れていたらしい。そんなことは、法に触れるとかなんとか言っていたが、結局まとまったお金と引き換えに、私にシマウマを譲ってくれたよ。それで、私はこの子を剥製にしたわけだ」

「あなたが剥製にしたんですね」
その事は意外に感じられなかった。この男なら、それぐらいのことができるというような雰囲気は漂っていたのだ。

「私は医学部に通っていたから、解剖は慣れていた。剥製というものにも、興味を持っていて、以前から本も何冊もそろえていたくらいだ。それで、シマウマの体を引き裂いて、内臓を抜き出した後、防腐処理をしたのけたわけさ」

男の声は淡々としていた。当時を思い出して、追憶にふけっていると聞いた感じはなかった。

「それ以来、この子は納屋にいるわけだ」

「あの……」
僕は遠慮がちに声をかけた。確かめておかなければならないことがある。

「サーカスの人たちが譲ってくれたと言っても、一般市民の家に大型動物の剥製があるなんて問題じゃないでしょうか？ 罪に問われるんじゃないかもしれませんか？ それに大体、こんな風に外から見える窓辺に置くないで」

「フッフ……確かにそうだね」

男は低く笑った。

「だが、どうしてだか、その無理が通るのさ。このあたりの連中は私の

ことを怖がっていて、関わらないようにしているからね」

そして、僕の足元にいるリュウを見やった。リュウは僕の足元に隠れるようにして、おずおずと男の方をうかがっていた。何だか、いつもの元気がない。

「その犬も、素敵な剝製にすることができるといえるよ。赤い毛を輝かせ、前足をしっかりふんばって君の方をじっと見つめ続けている、といった具合にさ。まあ、君が望めばだけどね」

「やめて下さい」

僕は慌てて、男の言葉をさえぎった。リュウが、もの言わぬ力チンカチンの像になっているのを想像するだけで、ぞっとした。第一、リュウはまだ生きているのだ。

「ただの冗談さ。忘れてくれ」

男が言った時、「お兄さん、何やってるの？」と僕たちの背後から声がかかった。驚いて振り返ると、枝垂れ桜のそばに一人の女性が立っている。

「なかなか家の方に戻ってこないから……。それに、その方は誰？」

彼女がこちらの方へ歩んできたので、僕はその姿をはっきり見る事ができた。脱色したような肌に、切れ長の目とすっと伸びた鼻筋、薄い唇という整った顔立ちの女性だった。男のことをお兄さんと呼んでいたから、妹なのだろう。だが、年は大分離れているらしく、目元や唇に若さの名残があった。

「いや。納屋とシマウマに興味を持ってくれたらしくてね。ちよっと、話してたところさ」

「まあ。そんなことで引きとめちゃ、お気の毒じゃない。犬の散歩の途中らしいのに」

男の妹は、僕の方に頭を下げた。

「すみません。兄は家に引きこもっているものですから、話せる人がいたら、うれしくて仕方ないんです」

「いえ」

僕は頭を振った。

「僕の方こそ、珍しいお話伺うことができました。じゃあ、これで失礼させていただきます」

そう言っていて、リードを引っ張って、リュウをうながした。男と妹は並んで立ちつくしていたが、それが合図であったかのように僕に背を向け、家の方に歩きはじめた。庭の木立の向こうにあるのは、黒い瓦と白い壁の平屋らしい。男のシャツも、女性のワンピースも濃い茄子紺色で、それは夕暮れの光にじむように溶けて見えた。

僕は門を出ようとして、もう一度納屋を振り返った。蜜柑色の電球の下、シマウマは物言いたげに立ちつくしている。そして、窓には男の手の跡がうつすらと浮かび上がっていた。

それから、一か月ばかり僕はシマウマのいる地区の方へ足を向けることはできなかった。突然霧が晴れたように、中断していた大学生活に戻る事ができたのだ。退屈な講義や煩わしい人間関係に嫌気がさしていたはずなのだが、そうしたことが以前ほど苦痛でなくなっただのかもしれない。

自然毎日が忙しくなり、リュウの散歩も近周りで済ませるようになってしまっていた。

五月も半ばの日曜日、僕は久しぶりに、リュウを連れて土手の向こう側に行くことにした。田んぼを抜け、墓場ぞいの道をゆき、神社のある辻に出る。そうして、あの黒い木造の塀を見だした時、僕は思わず足をとめてしまった。塀につづく長屋門には、「忌中」の張り紙が貼られているのだ。

一瞬、息がとまるような気がしたが、僕はそろそろと門の方に近づいていった。そこには表札もかけてなかったが、中央には丸い笠で覆われた門灯がついていてそばには灰色の縁取りがされた紙が貼られている。そして、黒々と書かれた文字は、確かに「忌中」だった。僕はしばらく呆然と立っていたらしい。ようやく、歩き出そうとした時、道の向こう側を小さなお婆さんがやってくるのが見えた。日焼けした首に手ぬぐいをかけ、モンペを履いた姿はいかにも、これから農作業に出るらしかった。僕が呼びとめると迷惑そうに、金壺眼を向けてきたが、家の主について聞くとその目が変に光をました。

「そうだよ。この家の主人が死んだんだよ。急な心臓発作とかでね。ずいぶん変わった人だった。ほとんど姿も見なかったけど、たまに会う時も青白い顔してあいさつさえしなかったよ。まあ、お金はあったみたいだけど」

それから、声を低めて続けた。

「妹だっていう女と一緒に住んでたけどね。いい年した兄妹が二人きりで暮らしているというのも妙なもんさ」

お婆さんはまだ話続けたかったらしいが、僕はあいまいに頷いてそれをやり過ぎした。お婆さんのズック靴の足音が遠ざかっていくのを感じながら、僕は門の中に首をのぼしてみた。シマウマは以前と同じように、納屋の中にいる。だが、朝の光の中でみるシマウマは、どう見ても木製か陶器でできたつくりものにしか見えなかった。それは、等身大の木馬だったのかもしれない。

(了)